# ドイツ民俗学における ローマ・カトリック教会とナチズム

## ——特にゲオルク・シュライバーを中心とした宗教民俗学の位置付けをめぐって(その1)——

河野　眞

**Abstract**

The relation of German folklore belonging or near to Christtianity to Nazism has been investigated relatively little till now. The Chatholic Church was one of the very few opponent bases against the Nazi regime on the one hand, but it had much common to this fatal political power on the other hand. This conflict appeared among other things in the 'religious folklore' that became popular from the 1920's to 1940's. Here, with regard to this problem, a special view is taken of Georg Schreiber (5 Jan. 1882 Rudershausen bei Duderstadt-24 Feb. 1963 Münster), who was a great theologist, a historian of Medieval Period, a representative person of the folklore of the Catholic Church and a Dietman (1920-1933) of the political party of 'Zentrumspartei'

In 1965 Hermann Bausinger, a German folklore scholar, criticized Georg Schreiber because of his folkloristic thoughts that were 'essentially coherent to the national–socialistic folklore', although he emphasized at the same time G. Shreiber who struggled against the oppression by the Nazis. In this first part of the study it is treated how the religious folklore was founded by Adolph Franz, a scholar of the liturgy, from the viewpoint of the Catholicism in the first decade of the 20th century and in what position G. Shreiber stood in the development of this scientific field at all that had been meanwhile characterized by the organized movement of the Catholic Church.

欧米の民俗学の展開においてドイツ語圏の国々のもつ意味は独特である。その比重が小さくないことは，民俗学を指す一般的な語彙 folklore の提唱（1846年）に遥かに先立って，既に18世紀後半にドイツ語の Volkskunde 使用例がみられることが示している[1)]。もっとも民俗学の形成は広くヨーロッパの諸国に共通であり，特定の国や民族に帰せられるものでない。それを前提にした上でのことであが，ドイツ語圏はやはり民俗学の揺籃であり，またこの学問がやや無理を押して育成されたことの問題性も含めて，いわば保育器の役割を果たしたのであった。しかし民俗学にとってのドイツ語圏の意義は，プラスの方向においてだけではない。そこにおいて民俗学は，マイナスの方向にも作用することを露呈した。端的に言えば，

民俗学は，20世紀の第2四半世紀にナチス・ドイツと親近な関係に立ちいたったのである。とは言え，この事実は単純ではない。今日ではナチズムが絶対的な悪であると評価は定まっている。しかし1930年代から1945年にいたる時期には，ナチズムは多くのドイツ人によって支持される潮流であり，〈ナチズム〉は誇りをもって口にされた合言葉でもあった。民俗学の分野でも，〈ナチズム民俗学〉という潮流が台頭した。しかしそれ以上に問題なのは，積極的にナチズムとの提携を名乗らなかっ人々のあいだにも，ナチズムと通いあうものが潜んでいたことである。

ナチズムは今日ではほぼ万人が排斥する禍々しい過誤である。しかしナチス・ドイツの同時代人については，同調に走ったか，批判の姿勢を堅持したか，あるいは加担したか，抵抗したか，というように截然と黒白に振り分けることは難しい。際立った抵抗の事例においてすら，その抵抗者の立脚点にまで立ち入るなら，相反する要素が混在していたことが分かってくる。かの七月二〇日事件然り，白薔薇事件然りであり，ナチズムと反ナチズムの境界ははなはだ模糊とした様相を呈している。そうした事情は，これからとりあげるナチズムとカトリック教会系の民俗学の関係においても同様に認められる。しかし決して事態が曖昧であるわけではない。その一見入り組んだ様相のなかには，明瞭な筋道が走っているのである。

ナチズムが強権を揮い，それに対抗できたやも知れぬ諸勢力（社会民主主義，労働者組織，伝統的な保守階層，軍隊，大学）が次々に潰えていった1930年代のドイツにおいて，辛うじて残ったのはキリスト教会であった。それがヨーロッパの風土である。しかし教会は政治権力ではない。政治権力と等しい政治的効果を期待することは，歴史の実際を見誤ることになる。その保留の上でのことであるが，やはりキリスト教会は一定の現実的な力であった。しかしそこでも，第三帝国という歴史的必然が不可避にした構図を免れてはいなかった。教会もまた，ナチズムと似て非なるものであり，また非を謳って似ていたのである。その脈絡はどうであったか，それがこの小論の課題である。

## ヘルマン・バウジンガーの批判

ナチズムのなかでのカトリック教会の位置を計るとき，民俗研究はひとつの指標である。もっともこのこと自体が今日では強く一般の意識に上らないのであるが，その所以もまたこれからの検討のなかで明らかになるであろう。ともあれ，カトリック教会は，ナチズムに流されない部分を最後まで保持していた。そしてそこに拠所をさだめた代表的な人物のひとりに，ゲオルク・シュライバーがいた。ドイツ民俗学の歴史に屹立する学究であり，また象牙の塔の外においても大立者でもあった。1920年以来，ナチ党の政権獲得まで，カトリック政党である中央党の国会議員として影響力があったのである。授権法には賛成をしたものの，第三帝国時代を通じての抵抗者の部類に入るであろう。その活動の基本にあった民俗学とは

いかなる性格のものであったのであろうか。

ここでは，ヘルマン・バウジンガーの見解を聴くことから始めようと思う。バウジンガーは1960年代以降，今日にいたるまで，ドイツの民俗学界を代表する人物として国際的にも知られている。伝統文化に拘泥していた民俗学を，ドイツにおいてはバウジンガーが現代社会の研究に転換させたからであり，その転換の方法に新機軸があったからである[2)]。そのことはここでは措くが，注目すべきは，その土台に，ナチズム問題が横たわっていたことである。ドイツの民俗学の場合，民俗学がナチズムと関与したことが致命的な過去となっており，それゆえ第二次世界大戦後は一から出発したと言ってもよいところがあった。その時に避けて通れなかったのが，ナチズム問題であった。民俗学という学問分野の再建者は，いずれもこの問題と対決しており，またその対決の仕方の差異が，再建の方向の違いにつながったところがあった。なかでも，ナチズムと民俗学の関係について，最も厳しく関与を問い，最も果敢に過去の清算を主張したのがバウジンガーであった。そのバウジンガーのナチズム論は，当然にもカトリック教会系の民俗学への評価を含んでいる。またカトリック教会系の民俗研究を代表する人物であるゲオルク・シュライバーへの言及も欠けてはいない。1965年に書かれた論考『フォルク・イデオロギーとフォルク研究』の一節「キリスト教会とナチズム民俗学」である[3)]。

……これらの事情を明らかにするには，教会とナチズムの関係という一般的な問題に否応なく入りこむことなるが，さりとてホッホフートが提起したかの難問[†1]の全てにこの小論で答えようとするのは，それまた無責任な仕業であろう。とは言え，ナチズムとキリスト教会の両陣営のあいだで，思想的に先鋭な衝突にまで発展せず，明確なかたちをとることもなく終わったのは何故であったかという差し迫った問いに答える程度の部分的な対応なら，許されもしよう。事実，これは，大局的な見渡しにおいて誤らなければ，回答が可能な問なのである。

ヒトラーが，1933年5月23日の演説において，宗教は〈我らが民族体（フォルクストゥーム）を維持する上で，最も重要なファクターである〉と述べたことはよく知られている。もっともこれが戦術的なポーズに過ぎないことは，まもなく実際の政策によって明らかになった。しかしすでにこの発言のなかに，宗教を取り込む上での原理が非常に明瞭にあらわれている。すなわち，より大きな目標は，宗教ではなく，民族体（フォルクストゥーム）の維持におかれていたということである。しかしそれにもかかわらず，この命題は，民俗学に造詣の深い神学者には，誘惑的であり，また通じ合うものがあるように感じられたのであった。……神学となれば，その中心人物は，何と言ってもミュンスターの偉大な神学者，ゲオルク・シュライバーということになろう。シュライバーは，宗教民俗学の構築に向けて膨大な論考をものした人物である。またナチズムの政策にたいして公然と反対を言

明して憚らなかった。そして第三帝国時代を通じて絶えず迫害にさらされ，その活動も妨害に遇った。ところが彼の著作には，民族体（フォルクストゥーム）イデオロギーの本質的な要素が走っているのである。1930年に慣行された著作『ナショナルな民俗学とインターナショナルな民俗学』において，彼は，オットマル・シュパンの集団的共同体社会学を斥けて，フォルクストゥームを〈すべての時代を通じて，自立した行為者たるフォルクから流れ出た生命の充実〉，また〈巨大な大家族〉と呼んで，〈変わらない，持続するもの，固い部分〉をこれに帰せしめると共に，個体をフォルクストゥーム（民衆体・民俗体）という大地のなかに〉しっかりと根づかせることが大事であると力説した*1。また1936年の著作『ドイツとスペイン』では，民衆宗教性（フォルクスレリギオジテート）にたいするスペインの強力な影響を研究したが，そこでも〈固有のあり方〉（アルトアイゲネス）が常に作用していたことに注意を喚起した*2。さらに1937年には，『民俗学から視角からみたドイツの農民的信仰』を書いて，〈敬神の念篤い農民性にこもる宗教的思念世界〉を叙述したが，そこではまた，ゲルマン性のもつ高度の文化力と驚くべき生命力を強調している。そしてこう述べる。〈福音とフォルクストゥーム（民衆体・民俗体）は，互いに手を携え，互いに支えあっている〉*3。シュライバーは1947年に，第三帝国時代におこなった民俗学の側からの抵抗を擁護する文章を書いた。そのなかで彼は，宗教民俗学の活動を次のようにまとめている。すなわち宗教民俗学は，〈強権化しゆく国家観念に対抗して，フォルクストゥーム（民衆体・民俗体）の尋常ならざる活力を表に出した。フォルクストゥーム（民衆体・民俗体），それは，人的紐帯と宗教という源泉から流れ出て，顕著で射程の大きい形態を作ってきた。〉そしてこの文章の最後では，こんな期待を表明する。いずれは〈宗教を活力とするフォルクストゥーム（民衆体・民俗体）が力強く名指されて〉前面に立ち現れ，〈古臭い諸々のリベラリズムは，骨董品として片隅におかれる〉ことになるであろう*4。

こんな引用を続けるのは，仮面を剥ぎ，暴露を事とするセンショーション・マニアと紙一重の危険な仕業であろう。それゆえ，ゲオルク・シュライバーがナチズムの宣伝家たちの迫害にさらされたことには，改めて注意を促したい。しかし宗教民俗学のかかる書きものにおいてフォルクストゥームが力説されたのは，それこそが司牧神学の対象と考えられたからではなかった。力点は，フォルクストゥームの自立した固有性におかれていたのである。この点では，シュライバーを，カトリック教会のハンス・コーレンやプロテスタント教会のアルブレヒト・ヨープストと同列に並べても差し支えあるまい。またその限りにおいては，たとえばヘルベルト・グラーベルトが〈固有文物と借用文物〉を峻別し，農民性とキリスト教を〈2つの異なった世界〉とする見解に立ったのとは，アクセントの置き方こそ違え，その違いは相対的でしかないであろう。それもごく僅かな差異である（たしかにグラーベルトと，他の教会民俗学者たちのあいだには，大きな距離があることを認め

なければならないとしても)。またそうしたテーゼが，人種観に組みこまれることも少なくなかった。たとえばカール・フォン・シュピースは，こう言明したものである。〈古アーリア人の遺産を覆っているのは，前部アジア[†2]の神殿の魔霊に他ならない〉。こんな理論を土台にしておこなわれる推論が，有益な脈絡の発見につながるはずはない。〈後世の歪曲〉に剪定を加え，いにしえの遺産を純粋な形で再び提示するといったところへ延びてゆくは，むしろ必然の勢いであった。

*1 Georg Schreiber, *Nationale und internationale Volkskunde.* 1930. S. 141f.

*2 Georg Schreiber, *Deutschland und Spanien.* 1936 S. 449f., S. 453.

*3 Georg Schreiber, *Deutsche Bauernfrömmigkeit in volkskundlicher Sicht.* 1937, S. 13, 18, 16.

*4 Georg Schreiber, *Volkskunde einst und jetzt. Zur literarischen Widerstandsbewegung.* In : Festgabe für Alois Fuchs zum 70. Geburtstag, hrsg. von Wilhelm Tack. Paderborn 1950. S. 275 u. S. 313f.

(語注)[†1] 作家ロルフ・ホッホフート（Rolf Hochhuth）は，ローマ法王庁がナチスによるユダヤ人大量虐殺の情報を得ながら黙認していたとの骨子による戯曲『神の代理人』（Der Stellvertreter）を1963年に発表して，大きな問題提起を行った。

[†2] 前部アジア（Vordere Asien）は，地域的には，ほぼオリエント全域を指す呼称。

一読して知られるように，まことに挑発的な批評である。ハンス・コーレンがゲオルク・シュライバーに通じるものを持っていたというのは無理ではないが，アルブレヒト・ヨープスト，さらにヘルベルト・グラーベルトとも同質であるというのは，喧嘩を売っている観がある。グラーベルトはナチズムの宗教民族観のひとりで，ナチ党の幹部アルフレート・ローセンベルグやR. ヴァルター・ダレーに近かった人物である。もっとも論難の一方で，バウジンガーはゲオルク・シュライバーの抵抗者としての実績にも一再ならず言い及んでいる。それにもかかわらず，カトリック教会の民俗学とナチズムの同質性を説くことは止めない。これによってバウジンガーが何を構想していたのか，今日ではこれも，あながち無意味な設問ではないのである。

ところで角度を変えてみると，もうひとつ注目すべきことがらがある。バウジンガーのナチズム論は，これと同趣旨の他の数篇ともども，一般にも割合よく知られている。ドイツの民俗学界となれば，発表当時から，これを重視してきた。しかもその説くところは強烈である。問題は，それにもかかわらず，カトリック教会からは反応がなかったと思われることである（これを筆者は，バウジンガーその人から聴いたことがある)。この教会側からの無反応は，これはこれで念頭にとめておいてよいであろう。応答が皆無であったかどうかはともかく，話題になるような動きは起きなかったのである。

## ゲオルク・シュライバーの初期の経歴[4)]と研究活動の開始

ゲオルク・シュライバー（Georg Schreiber 5. Jan. 1882 Rudershausen bei Duderstadt-24. Feb. 1963 Münster）は，ヴェストファーレン州アイヒスシュタット地方の田舎町ドゥーダーシュタットに森林管理官の息子として生まれた。学齢に達した後，1895年から1901年まで通った司教都市ヒルデスハイムのギュムナジウムは，中世の大聖堂付属学校に遡り，1595年にイエズス会の人文学学院に改組された経緯を有するなど一貫して司教の影響下にあった高等学校であった。その校長が教会史家であったことも関係して，その頃から歴史研究に関心を寄せるようになり，卒業とともに1901年にミュンスター大学のカトリック神学部に入学した。ミュンスター大学は，1818年にプロイセンの政策によって哲学・神学アカデミーとして設立された学校で，シュライバーが入学した直後の1902年にさらに法学部が加わって大学（ウニヴェルジテート）となった。シュライバーは，1904年に神学部を終了して，司祭になるためのヒルデスハイムでの研修を経て，1905年4月に聖職者となった。そしてヒルデスハイムのギュムナジウム「ヨゼフィーヌム」で短期間教職に就いたが，1906年にはベルリン大学に再入学した。

ベルリンには8年間滞在して，歴史学とゲルマニスティクの研究を進めたが，関心の比重は教会史にあって，その分野では歴史学のミヒァエル・タンクル（Michael Tangl）に就いた。タンクルは，折から進行していた中世資料の総合的な編纂であるMGHの編者でもあったが，シュライバーにはウルリッヒ・シュトゥッツ（ボン大学）が開拓した分野である教会法制史，とりわけ私有教会制のテーマを手がけることを勧めた。それはシュライバーの最初の大部な著作『12世紀の教皇庁と修道院――フランシスコ会以前の修道会への特権発給と修道会会則ならびに特に修道会による私有教会制にかんするパスカリス2世からルキウス3世（1099–1181）に至る教皇文書にもとづいた研究』[4–a)]に結実した。これは1909年にベルリン大学の哲学の学位論文として受理され，翌年にはシュトゥッツが編集する「教会法叢書」のひとつとして刊行された。またその副産物として成立した『中世における聖体奉献儀礼の用語の研究』[4–b)]によって1913年にフライブルク大学で神学の学位を得た。1913年にミュンスター大学で私講師となり，そのさい上記の『12世紀の教皇庁と修道院』が教授資格論文に該当すると認められたが，なお別個のテーマとの取り組みを求められたことから，教壇に立つにあたっての記念講演として「グラティアヌス時代の教皇の僧院政策の目的」を講義した[4–c)]。グラティアヌスは12世紀に『グラティアヌス法令集』(1140年, 'Concordia discordantinum canonum', 通称は 'Decretum Gratiani'）を編んだイタリアのカマルドール会士で教会法学の定礎者である。その講義の原稿は残っていないようであるが，シュライバーが教会の立場から政治や国家の政策に強い関心をもつことを鮮明にした最初の出来事と言えるであろう。

1914年にミュンスター大学において折から空席となった慈善学とキリスト教文化史の教授

となることを望んだが成功せず，1515年4月にレーゲンスブルク大学へ移って員外教授として教会法とバイエルン国家法・行政法を担当した。レーゲンスブルクで過ごしたのは5セメスターで，その期間にバイエルン地方の宗教事情に接したことが，宗教民俗学，またバロック以来の近世の民俗文化への関心につながったとされる[4-d)]。1917年にミュンスター大学神学部の教授ポストに欠員が発生し，また神学のポストの増設もあったことから，同年7月に正教授に就任した。それにあたってはタンクルとシュトゥッツが推薦をおこなった。これ以後、シュライバーはミュンスター大学を拠点として旺盛な学術活動に入っていった。やがて1919年に第一次世界大戦が終り，ドイツは次代の国家構想が模索される時代に移った。そのなかでカトリック教会でも，中央党が新憲法への対応（特に国家と教会の関係の諸条文）を練るなどの動きがあった。またそれをワイマル国民会議（1919–20）のメンバーとして中心になって担当したヨーゼフ・マウスバッハ（Joseph Mausbach 1861–1931）の後を継ぐ教会行政に明るい学識者を政界に補充する必要が生じ，中央党は，シュライバーを〈ヴェストファーレン北部〉の選挙区から立候補させた。1920年のことで，これ以後，シュライバーは1933年まで13年に渡って国会に議席をもつことになった。

以上はゲオルク・シュライバーの初期の経歴の概略にふれたのであるが，これから知られるように，その研究活動の基礎は中世を中心にした教会史と広い意味での法制史であった。これが同時代の他の民俗研究者に比べてゲオルク・シュライバーが資料批判においてはるかに優っていた所以である。もちろん研究における視点の独自性も欠けてはいなかった。しかしその背景に複雑なものがあった。というのは，ドイツの民俗研究のなかでは，ゲオルク・シュライバーの存在も広くカトリック教会の民俗学も，必ずしも主流ではなかったからである。またそこに宗教民俗学ないしは教会民俗学が標榜された理由もあったのであるが，そうした民俗学の他の潮流との関係などを含めて幾つかの脈絡をほぐすことが，宗教民俗という分野の特質と時代状況を知ることにつながるであろう。

〔補論〕なおここで補足的に注意しておかなくてはならないのは，民俗学と訳されるフォルクスクンデという言葉には日本の民俗学とは違った事情があったことである。日本では〈民俗学〉は20世紀の始めに新たに目指された民衆研究の方向にたいして命名された造語であり，主に柳田国男と折口信夫の系統の学問を指すようになっていった。しかしドイツのフォルクスクンデは，新造語ではなく，すこぶる一般的な語彙であった[5)]。19世紀後半にはグリム兄弟の系統の神話学系統の風俗研究が比重を増していったが，その系統とはまったく関連のないところでもフォルクスクンデの名称がつかわれたのである。またその意味するところも，それぞれの使用者によって大きな差異があった。たとえば，19世紀の半ばから後半にかけて民衆生活を流麗な筆致で活写して一世を風靡したハインリヒ・ヴィルヘルム・リールは，グリム兄弟とは別個のフォルクスクンデの定礎者であった[6)]。同じ時期に民衆

研究を大規模に推進したオーストリアのヨーハン太公とそのグループも，独自にフォルクスクンデを名乗った[7]。ゲオルク・シュライバーはそれらより遅れて20世紀の20年代からの活動であるから，グリム兄弟の系譜を継ぐドイツ民俗学会を意識していたであろうが，それへの帰属意識を持ってはいなかったであろう。同じフォルクスクンデの名称のもとに，カトリック教会が独自の学問伝統を形成しつつあったからである。

## アドルフ・フランツの典礼史研究

ゲオルク・シュライバーは宗教民俗学の確立者であるが，先人がまったくいなかったわけではない。ここでは注目したいのは教会史家アドルフ・フランツである。典礼史の専門家で，主著には『ドイツ中世のミサ』(1902年）があり，また『ドイツ中世の祝祷』２巻（1909年）がある。とりわけ後者は注目すべき研究である[8]。ゲオルク・シュライバーは，宗教民俗学の定礎者としてしばしばこのフランツの名前を挙げている[9]。フランツの研究はゲオルク・シュライバーがひとつの学問伝統の起点と名差したくらいに画期的なものを含んでいたが，その要点は典礼史研究の視野を教会堂の外に拡大したことにあった。すなわち正統的な儀礼である狭義の典礼の影で看過され勝ちであった副次的な儀礼である祝祷(Benediktion)がヨーロッパ文化の形成に果たした役割に着目したのであった。

典礼は，原理的には，カトリック教会に属するヨーロッパのすべての地域，すべの教会堂を通じて統一的であるところに意義がある。それゆえ，歴史的には何度も典礼の統一が図られ，逸脱がとがめられてきた。そしてその引き締めが教会に活力をもたらした。それにたいして，日常生活の諸相は多様である。これにかかわるのが，祝祷である。それはしばしば，民衆典礼（Volksliturgie）の様相を呈する。歴史的にみると，キリスト教社会では，古くから祝祷がかなりきめこまく行われており，それによって教会堂のなかとは趣の異なる宗教性が広く社会をおおっていたのであった。フランツの研究は，それを歴史資料にもとづいて詳細に掘り起こしたものであった。すなわちその著作を主な項目について見れば，聖水と水の聖別およびそれをおこなう機縁，塩・パン・葡萄酒・油・野菜・果物・薬草への聖別，祝祷のカレンダー上の節目（御公現・マリアの聖燭祭・聖ブラジウスの祝日など），四旬節と復活節の聖別，家屋と家畜小屋への祝祷，僧院にたいする祝祷，自然現象（嵐・旱魃など）にたいする祝祷，家畜の祝祷，婚姻および母親と小児への祝祷，危険にたいする祝祷（戦争・巡礼，また種々の神の裁断すなわち決闘や熱した鉄をつかむことによる決着などのさいの祝祷)，病気や憑きもの，また調伏のさいの祝祷と護符，といった内容である。フランツの記述は，教会資料を丹念に追跡しており，個々の事例への詳細な記述となっている。たとえば，大根の栽培に因んだ祝祷といったものまで拾われている。ここでは，その特徴を知るために，耕地巡回の箇所を引用してみたい[10]。

これらのミサの他に，他の種類の公式の信奉行事が行われた。それは，行列ないしは祈願行である。ローマではすでにグレゴリオ時代以前に，聖マルコの日である4月25日には，祈願行列が行われ，〈大連祷〉（litania major）と呼ばれていた。しかしそれは聖マルコとは関係のないものであった。それは，古代の異教時代のローマにおいてロガリア祭が荘厳な巡回行事がなされ，熟してゆく穀粒が神々の加護に委ねられたのと同じ日に行われた。キリスト教の行列は，グレゴリオ・ミサからも知られるように，まっく同じ過程をたどった。また目的も同じで，穀物の成育とその危険からの守りが祈られた。ガリアでは，511年のオルレアン公会議以来，ヴィエンナの司教マメルトゥスによって導入されたキリストの昇天の前の3日間にわたり祈願の行列が行われていた。……

ガリア人やゲルマン人のあいだでは異教時代にも耕地巡回がおこなわれていたが，祈願行列のフランク王国への導入はそれを上回って歓迎された。ガリア人は，彼らの神々を白い布で覆って耕地のあいだを巡回する習慣をもっていた。またゲルマン人も同様の慣行をもっていたことは，「迷信一覧表」*に，偶像を担いで耕地を歩むことへの言及があることによっても知られる。▷ネルトゥス神の巡幸，またその他の春の行事は，いずれにせよ豊作の達成を目指す宗教儀礼とかかわっていた 。◁ これらの古くからの習俗のキリスト教化を，宣教師たちは試みた。9世紀からは祈願祭行列と聖マルコの行列がドイツへも導入された。これは，異教の耕地巡遊の代替であった。それらがキリスト教の行列に転換したことは，ビーレフェルトのシルデシェ尼僧院の院長マルクヴィートが940年に宣布した規定が如実に示している。それ以降，僧院の下僕たちは，聖霊降臨節の月曜に巡回を行わねばならなくなったが，その時には教会堂守護聖，すなわち聖遺物を奉じておこわれるのであった。またそれに先立って家々の御祓，すなわち聖水の振り掛けおこうべきこととされた。これによって異教の巡遊における無秩序の代わりに，改悛と喜捨をおこなうべきことを尼僧院長は促した。尼僧院の中庭で，歌と祈りで夜を過ごしたあとで，始めて翌朝から巡回が始められ，その行列は，僧院教会堂において尼僧院長が種の成育と天候の被害が防がれることを祈って終わるのであった。

（語注）* “Indiculus superstitionum”は，高地オーストリアのラームバッハ僧院（Lambach）に伝わっている15世紀初めと推測される手書きの文書を指す。

この箇所を引用したのは，特に本書のなかで際立っているからというわけではない。しかしいずれの部分も全体の構造を映しているというという見方をすれば，たまさかの1節からだけでも，フランツの研究の特徴が窺うことができないではない。大きな枠組との関連で言えば，ドイツ民俗学史とカトリック教会の宗教民俗学の展開のなかでのフランツの位置である。先ず第一は，フランツの視点に，ロマン派の民俗学に接続するものが認められることである。ゲルマン人の耕地巡幸の行事，それを映したとおもわれるタキトゥスが伝えるネルトゥ

ス神の巡幸が言及され，またそれに注目したマンハルトの記述が引証される（▷◁の箇所）。その点ではロマン派の神話研究の系譜とのあいだで亀裂が起きていない。これはカトリック教会の民俗研究がこの時期には初期の段階にあったことを示している。もうひとつは，ここでのテーマである耕地巡回という行事のあつかい方である。その大著のなかのこの部分が，耕地巡回や行列行事にかんする最もまとまった，またほぼ唯一のものである。ということは，野外で多数の民衆の参加によって挙行されるカトリック教会の行事としてひときわ際立った種々の行列行事に，フランツは余り関心を寄せていなかったのである。後になると，たとえば最も盛大な行列行事である聖体大行列をはじめとする種々の行事について，研究者たちは詳細な歴史的・民俗学的な観察を心がけるようになってゆく[11)]。またそれを教会組織がもとめたところもあったのである（これについては，次の章を参照）。そうした要素があまり表立っていないという点でも，その当時は，教会民俗学は開始期にあったと言えよう。

なおこの時期にキリスト教会にちなむ現象に着目して民俗学に接近するような仕事をしていたのはアドルフ・フランツだけではなかった。グラーツ大学の教授であったゲルマニストのアントーン・シェーンバッハも（Anton E. Schönbach 1848–1911）も開拓者のひとりであった。しかもフランツの『ドイツ中世の祝祷』の序文には，両者の関係を窺わせるエピソードが書きとどめられている。それによると，『ドイツ中世のミサ』を完成した直後，フランツのその著作についてシェーンバッハが『ドイツ民俗学誌』上で書評を書いた。そのなかで，フランツには今後の研究の方向として正統的な教会儀礼の外縁部にあたるような領域を手がけてはどうかとの期待を表明すると共に，シェーンバッハ自身は迷信・呪文，また民間行事や民間習俗をあつかうつもりであるとの一種の役割分担を提案した[12)]。これがそれ以後，フランツに祝祷に的を絞った研究に向かわせることになったというのである。ちなみにシェーンバッハはすでに19世紀の80年代からグラーツの年代記や説教記録にみえる民間習俗について研究を始めており，やがてライフワークとして中世末期の民衆説教で知られるレーゲンスブルクのベルトルトの研究に進んでいった[13)]。したがって，民衆説教を研究分野として開拓した人物でもあった。なおシェーンバッハはゲルマニスティク系の民俗研究家であるが，民俗学の学問性に留意し，この分野が素人判断に傾き勝ちな傾向に警告の文章を発表したりもしている[14)]。こうして20世紀に入った頃から，カトリック教会とゲルマニスティクの両方から教会とその周辺を対象とした民俗研究が進みはじめていたのである。とは言え，その後の展開において両者が融合したかどうかはまた別である。その問題は後に取り上げる。

## カトリック教会における民衆信仰への関心の高まり

こうした先人の活動を背景に，カトリック教会の民俗研究は次第に拡大し，やがて1920年代後半から，ゲオルク・シュライバーが本格的にその宗教民俗学を展開してゆく。しかし注

意すべきことに，これまた孤立した現象ではなかった。この時期には，それはカトリック教会の趨勢ともなっていた。事実，1930年前後には，この分野は活況を呈していた。宗教民俗の研究にたずさわった人々の多くはゲオルク・シュライバーの影響を受け，またシュライバーが次々に企画した宗教民俗学の叢書を核にして集った。同時に，独自に宗教民俗学に進んだ人々もすくなかった。数例を挙げると，フライブルク大学の教会史の教授であったルートヴィヒ・アンドレーアス・ファイト（Ludwig Andreas Veit）[15]，ミュンヒェンのベネディクト会僧院ザンクト・ボニファーツの修道士ロムアルト・バウアライス（Romuald Bauerreiss）[16]，バイエルン州の小さな町トラウンシュタインの司祭であったルドルフ・ヒンドリンガー（Rudolf Hindringer）[17]などである。

また教会人ではない人々のあいだでも，カトリック教会をめぐる民俗への関心の高まりが起きた。その口火を切った存在としては，アンドレー夫妻（Richard Andree, Marie Andree-Eysen）を挙げることができる[18]。夫妻の研究は，特に物質文化の面からのアプローチに特色があった。やがてこの方向は夫妻に私淑したルドルフ・クリスによって巡礼研究に発展し，さらにクリスの養子レンツ・クリス＝レッテンベックによってカトリック教会をめぐる民俗工芸の研究にまで展開して今日にいたるのである。さらにオーストリアのウィーンでは，都市民の歴史研究から始めたグスタフ・グーギッツ（Gustav Gugitz）がオーストリアの民衆研究の伝統の上に独自の宗教民俗の研究を進めていた。

またカトリック教会の行政面で指導的な地位にある人々からも宗教民俗（教会民俗）を重視する動きが高まった。マイセン司教クリスチアン・シュライバー（Christan Schreiber 1872–1933）[19]やレーゲンスブルク司教ミヒァエル・ブーフベルガー（Michael Buchberger 1874–1961）などである。前者はドイツ全土の巡礼地を網羅した事典を編集しており，後者は今日においても指標的な位置にある大部なレキシコン『神学・教会事典』の提唱者で編集責任者でもあった（1830–38年の間に全10巻が刊行された）[20]。

ここで看過してはならないのは，これらの動きの底流にはたらいていた要素である。当時は民間習俗への愛好が高まりをみせていた。それゆえ，その風潮に惹かれた人々が教会関係者のあいだにも少なくなかったと考えるのは，間違いではない。しかしもっと根深いものがあった。キリスト教会が組織的な活動として，この動向と関わっていたことである。その様子は，この時期のカトリック教会の指導者であったブーフベルガーの報告が示している[21]。

フォルクストゥームとフォルク慣習（Volksbrauch 民俗）に潜む価値に注目したのは，個々の聖職者だけではなかった。教会官庁もそうであった。教会官庁は，繰り返し通知や指示を出して，聖職者たちを，民俗研究・郷土研究へと促した。すでに1912年にミュンヒェン大司教区庁の教区司祭団司牧会議の担当局は，〈個々の司祭教区においていかなる宗教民俗がおこなわれ，またそれらは司牧の観点ならびに社会的見地からどのように評価すべきか

をまとめること〉という通達を出していた。これに応じて多数の優れた報告がなされたが，なかでもヴァーギンーガー・ゼーの助任司祭であった故マティーアス・エルトルの仕事は傑出していた。彼は，その地域の多種多様な習俗を蜜蜂の如く熱心に収集しただけでなく，高度な知識を駆使して歴史的ならびに宗教的に解明を行ったのあった。彼の名前をここで挙げるのは，私の喜びである。

ミュンヒェン大司教区庁は，宗教的な民間習俗への注目とその保存を重視して，1929年にも改めて，各首席司祭教区の司祭からなる司牧会議にたいして，次のように課題を指示した。〈大司教区において教会民俗学（kirchliche Volkskunde）を樹立するために，教会暦ならびに人生暦において繰り返しおこなわれる民間習俗をまとめること。そのために，今なお行われている民間習俗ならびに習俗の名残を集計し，また可能ならば，バイエルンでの布教の歴史と，民衆自身の理解を基準に則して，バイエルンの習俗について宗教学的な注解をほどこすべきこと。〉

さらにレーゲンスブルク司教区公会議（1927／28年）は，その決定事項の第57条において，次のように定めた。〈聖職者は，民俗学・郷土学の育成に特に留意すべきである。それは，私たちの郷土文化が，その教会堂・巡礼地・僧院・民俗慣習・民間口承・聖者と根深く結びついて発展してきたからである。カトリック教会の司祭は，幾世紀を通じて，他の身分の者よりもはるかに民衆の生き方およびその永遠の価値と内的な関係を保ってきたのであるから，それはなおさらであろう。司祭は，職掌的にも真正の歴史記述者であり郷土文化の保護者である。――まことに宗教的な民間習俗は能う限り維持されなければならない。それらが湮滅する前に，すべての教区において収集されることが切望される。〉

またこの条文について，レーゲンスブルク司教区庁は1931年に次のような解釈をほどこした。〈宗教民俗（religiöse Bräuche）は，さまざまな意味で意義深く尊いものである。それらは，古い時代から教会生活に伴って歩み，多くの場合，教会暦（教会の祭礼，キリストの受苦や聖者への崇敬，死者の追憶）に依拠してきたが，急速に行われなくなくなる傾向にあり，過去のものと化しつつある。それらと共に，私たちの教会生活とフォルク生命の重要な部分が墓場へ向かうことになる。これらが全く消滅することを防ぐために，司牧者は，これらの宗教民俗にたいして最大の注意を払い，少なくともそれらのなかの最も尊いもの，また最も意義深いものを保存するように努めなければならない。特に宗教教育の授業や説教や，（諸々の団体での）講演などのさいに，司牧者がそれらに注意を促し，また解説することを通じてである。これらの習俗がひとつまたひとつと行われなくなってゆくときに，それらを記録し，収集し，少なくとも記憶に留めることは，教会生活の歴史にとっても意義深い。

それゆえ，各教区の責任者は，1931年5月1日までに，教区資料館と司教区庁資料館にたいして，それぞれの教区においていかなる宗教民俗がなお行われているか，また併せて

最近行われなくなった民俗でなお記憶されているものについても，報告していただきたい。特に注意を促したいのは，家庭での宗教民俗（家屋の祝祷，家の守護聖人，家畜守護者，宗教画・額の類，聖別される物品，燻し行事*1），さらに耕地にたいする祝祷（耕地行列，収穫民俗，畑地の十字架，畑地のチャペル，聖母像柱），秘蹟にちなむ民俗（洗礼，婚姻，初ミサ*2），死者の回向（死者板，埋葬，墓，追憶の行事）などである。
また収集がなされれば特に有りがたいのは，特定の地域で歌われる宗教歌謡である。そのさいには，できる限りメロディーも（伴奏楽器の種類も）も併せて，司教区庁に送付していただきたい。〉

特に意義が大きく感謝すべきは，フルダでの司教会議（1928年）において次の公示がなされたことである。〈当会議は，ドイツ学術緊急支援会（Notgemeinschaft der Deutschen Wissenschaft）が強く勧めている「ドイツ民俗調査」を拍手を以て承認した。各司教区の首長たちは，教会民俗の深い研究のための作業に一般の関心を向けることを心掛けるとともに，カトリックの教会民俗学の営為を，それに適した教区聖職者（そういう人材がいる場合には）に委ねることができること望んでいる。〉

以上が資料解説とドキュメントであるが，これらはドイツ・フォルクストゥームに学問的な基礎をあたえている「村の教会」のリュプケ・グループやその他の民俗識者の関心にも応えることになろう*3。

またゲレス協会が1934年に，独自に「宗教民俗学のセクション」をトリーアに設置し，本巻の編者*4にその運営を委ねたことも，ここでお知らせしておきたい……

（語注）*1　燻し習俗は，香炉による聖別・祝祷のこと。

*2　〈初ミサ Primiz〉とは叙任を受けた司祭が初めての司式を言う。

*3　Hans von Lüpke はこの時期のプロテスタント教会で影響力の大きかった「村の教会」（Dorfkirche）運動の指導者で，また同名の機関誌（1907年創刊）の編集者。

*4　ゲオルク・シュライバーを指す。

ブーフベルガーのこの報告に接すると，当時のカトリック教会への関心をかき立てられないわけにはゆかない。民俗調査や民俗研究，また民間行事の保存運動は，当時のカトリック教会にとっては，その分野に関心をもつ者の愛好心やたまさかの趣味などではなかったことが分かるからである。ミュンヒェン大司教区にみられるような教会組織の高レベルでの決議，司教区公会議といった教義にかかわるような重要機関の関与，またその決議や注解のいかにも切迫した語調，これらは，民間習俗がカトリック教会にとって緊要の課題であったことを窺わせる。〈カトリックの教会民俗学〉（katholische kirchliche Volkskunde）やそれと同義の表現が繰り返されるだけではない。収集対象を細部まで指示するなど，その切望ぶりはまるで

喉から手が出るほどと形容してもよい位である。ヨーロッパ諸国のローマ・カトリック教会の全体のあり方はともかく，少なくともドイツではかかる情勢にあったために，多くの教会人が民俗学やそれと重なる分野に進出していったと言えるであろう。またここでも，具体的な項目を挙げて祝祷の調査への指示がなされているが，1930年前後のこの様相をみると，先行する時期のアドルフ・フランツの祝祷研究も，やがて高まる教会をめぐる切実な状況とつながっていたことが知られよう。歴史研究には常に現代の投影という側面があるが，中世の祝祷研究は，20世紀初めの現実が必要としたものに他ならなかった。数世紀を隔てて歯車は噛み合っていたのである。

## ゲオルク・シュライバーによる景観（風土）の三層論

ゲオルク・シュライバーは，1920，30年代に多数の出現をみた宗教（＝教会）民俗の研究者のなかでも擢た存在であった。それは彼があつかったテーマが多様であり，膨大な執筆量に上ることによるが，またそれは研究における独自の視点とも重なっていた。それに対応して，方法論にかんする書きものも少なくない。そのなかで，はじめに手掛かりとして注目したいのは，その独自の術語 ‘Sakrallandschaft’ である。形容詞 sakral は中世ラテン語の sacer（heilig，holy）に由来する。sacer は教会の意味での〈神聖な〉を意味している。sacer fons は洗礼であり。sacrum は秘蹟（Sakrament），sacrorum は聖所（Heiligtümer 教会堂や巡礼地など）ないしは聖物（gottesdienstliche Geräte 典礼に用いる器具類）である。また縁語には，sacerdos（Priester 司祭），sacrator（Heiliger 聖者），sacerdotium（Priesteramt 司祭職），sacramentalium（geweihte Gegenstände 聖別された品物）sacrificium（Meßopfer 聖体〔＝ミサのときのパン，あるいは Messe ミサ〕），sacrarium（Sakristei 聖物室）など多くの教会用語がある。合成語も非常に多く，たとえば sacrificium vespertinum は〈主の晩餐〉（heiliges Abendmahl）である。要するに sakral はキリスト教会の意味での〈神聖な，霊的な〉である。また Landschaft は country，province あるいは landscape，scenery で，後者は絵画に描きとめられた風景など，何らかのまとまりの意識をもって把握された風景のことである。したがって景観ないしは風土と訳すことができる。ここでは，Sakrallandschaft に〈霊的景観（霊的風土）〉の訳語をあてることにする（教会的景観や福音的景観でもよい）。これは特に重要なキイワードのひとつと言ってよく，この霊的景観（あるいは教会的景観または福音的景観）を飽くことなき探究心でゲオルク・シュライバーは掘り起こし，解明していったのである。

ところでその観点からすると，一種の綱領的なタイトルによって耳目を欹てるひとつの論考がある。1937年に書かれた『霊的景観としてのヨーロッパ』(Sakrallandschaft des Abendlandes) である[24)]。これはゲオルク・シュライバーの多数の方法論考のなかでも短いもので，またその書き出しの部分が著しく文学的であり，一種のオマージュとなっているのが印象的である。

その高揚した文体で，ゲオルク・シュライバーは，霊的景観を，他の２種類の景観と対比させつつ語っている。自然的景観（Naturlandschaft）と文化的景観（Kulturlandschaft）である。

歴史学と民俗学のなかで，徐々にではあるが霊的景観という概念が育ってきている。インドや中国や日本やその他の東方の国々の宗教の歴史は夙にこれに親しんできた。しかしヨーロッパでも諸々の集団によってそれは存在したのである。モンテ・カッシノ，クリュニー，アシジ，モンセラート*1がそれを示している。しかしこの霊性という問題設定が言葉として現れたのは，まだ最近のことである。それを概観し，学問的に把握する作業となれば，ようやく緒についたところに過ぎない。

この霊的景観が展開するのは，聖性と畏敬が，かなり密度が高く緊密な人間集団の空間に現れる場合に限られよう。村落，郷土，庶民，民衆生活，血族，主従関係，仲間団体といった世界である。したがってそれは，不断に活動しつづける民衆的信奉に強く彩られた歴史的景観でもある。それは正に，時の流れを感知せしめるほどにまで歴史的である。オーバーバイエルンのマリーア・ドルフェン*2のごときは，輝かしい伝統も過去のものに移り変わっていった。また実願聖堂*3をめざして山巓への登攀がなされ，森の静謐が嘉されるに及んでは，霊的景観は自然景観と重なってゆく。素朴，簡潔，謙譲は，民衆的信奉の魅力的な特徴であるが，霊的景観はそれらへの感受性を含んでいる。霊的景観は，またエット谷*4でのように，僧院を中心にまとまりをみせることもある。あるいはシェーネ・マリーア*5の居所であるレーゲンスブルクの如く交通の要衝にして帝国都市である地点に聳立することもある。かかる場所においては，霊的景観は文化的景観と重なりあう。さらに言おう。水源の流出力も時には低下し，地下の伏流となって他所の信奉地や信仰上の他のモチーフに吸収されることもないではなかった。しかし伏流水は，場所を変えて湧出する。スウェーデン人のモチーフ，トルコ人のモチーフ，フランス人のモチーフ*6，それに世界大戦，これらは民衆の魂を震撼させずにおかなかった。苦難という幽霊女が国土をよぎるや，水流は場所を移しつつ出現した。まことに地下の水脈が養われたのは，民衆を襲う苦しみという暴風雨によるのであった。宗教的英雄，民間の救難者，色彩豊かな祭礼，神秘や信仰上の事件といった民衆のまっただ中での体験，それに願像と巡礼地，行列と祈願祭，霊的景観が出現するのは，これらのなかにおいてである。

それらにおいて聖性（Heiltum 聖所）は民衆性（Volkstum）へ移ってゆく。聖性は，大小の差異はあれ，支配圏をかたちづくる。それは特定の空間の相貌を形成する。それは，際立った力の場を組織する。その射程がどのようであるかを何にも増して記録しているのは霊験記*7である。霊験記には，地名がひとつまたひとつと書きとどめられ，ひよわな存在がその姿を現出する。もとより，ほんの僅かな数の農民集落や散村の動きしか伝えていないこともしばしばである。ところがそれが，信奉の中心地の所在を如実に物語る。しかも

たまさかではない。ケフェラール*8がそうである。トリーア*9もそうである。そしてマリーア・ツェル*10。これらの聖所は帰依の行脚という一大行進を形成した。そのとき巡礼規則は行進規則にまで発展した。聖所はまた多くの民衆的な記念品を産んできた。念持画片がそれを伝えている。メダルもそうである。農民のつくる陶器類がある。アルトエッティングでは，かの黒色の嵐の蝋燭にまでなっていった*11。音楽も波をなして高鳴った。教会歌謡から民俗歌謡が生成した。順巡礼者が喜んで歌う聖ヤコブの歌*12と，かの有名なカタラニアのヴィロライ・デ・マリアが呼応して響きわたった。……

（語注）*1 スペインにある聖母マリアの大きな巡礼地で，奇岩絶壁の風景でも知られる。

*2 バイエルンの聖母マリアの巡礼地

*3 実願聖堂（Gnadenkapelle）奇跡の伝承などをもつ信奉対象の図像などを擁したチャペル。宗教民俗（教会民俗）の用語での Gnade は本来は贖宥が認められることを言う。

*4 オーストリアにあるマリア巡礼地

*5 16世紀にレーゲンスブルクで奇跡を起こした聖母像で，同時代の優れた銅板画（Albrecht Glockendon 筆）によって広く知られた。

*6 17世紀の三十年戦争のときにスウェーデン軍とフランス軍がドイツ地域に侵入・破壊を行ったことを指す。またイスラーム教徒のトルコ人も15世紀から18世紀まで長く脅威の印象をあたえていた。それらの記憶は長く持続し，さまざまな災厄がこれらに起因するものとの伝承が生まれた。

*7 霊験記は Mirakelbuch への筆者の訳語。巡礼地で発現した奇跡や神秘的な治癒などが，独特の様式で記録されている。これを資料として活用することはゲオルク・シュライバーによって開拓された。

*8 北ドイツの巡礼地。

*9 巡礼地で聖母マリアの着衣が崇敬をあつめている。

*10 オーストリアの巡礼地。

*11 アルトエッティング（アルトエッティンゲン）はドイツのバイエルン州にあるドイツ最大の巡礼地。嵐の蝋燭は，嵐の時にその鎮静を願って灯すもので，巡礼地で授けられる。

*12 スペイン北部の巡礼地サンチャゴ・デ・コムポステーラに因む歌謡。

自然的景観（Naturlandschaft）とは，気候や地理的条件など所与の自然条件による限定を受けた場面である。〈文化的景観〉（Kulturlandschaft）は，芸術活動や諸個人の行動などで，これは文化における表層である。そしてその間にあって厚い層をなしているのが〈霊的景観〉（Sakrallandschaft）である。それは文化圏を特色づける母層であって，集団形成もまたこの層

においてなされるのである。では霊的景観はどのようにして把握することができ，またその独特の対象とは何であろうか，これが次のテーマである。

**参考文献**

1）ドイツ語の 'Volkskunde' の確認される最古の使用例は1782年というのが現在の発見の成果となっている。cf. Uli Kutter, *Volks-Kunde — Ein Beleg von 1782.* In : Zs. f. Vkde. 74 (1978), S. 161–166.

2）拙論「バウジンガーを読む——〈科学技術世界のなかの民俗文化〉への案内」愛知大学国際コミュ・ニケーション学部紀要「文明21」第２号，1998年。

3）Hermann Bausinger, *Volksideologie und Volksforschung. Zur nationalsozialistischen Volkskunde.* In : ZfVKde. 61. Jg. 1965,, S. 177ff.

4）ゲオルク・シュライバーの経歴については，Historisches Jahrbuch（1964）の次の２つの追悼文（特に後者）を参照。*Georg Schreiber (1882–1963). Gedenkansprachen in Trient 1963.; 'Begegnung mit Georg Schreiber'*, von Johannes Spörl, S. 246–252 ; *'Georg Schreibers Wissenschaftsweg und wissenschaftliche Werk'*, von Eduard Hegel, S. 253–270.

4-a) Georg Schreiber, *Kurie und Kloster im 12. Jahrhundert. Studien zur Privilegierung, Verfassung und besonders zum Eigenkirchenwesen der vorfranziskanischen Orden, vornehmlich auf Grund der Papsturkunden von Paschalis II.. bis auf Lucius III. (1099-1181).* Bd. 1.2. Stuttgart 1910 (Kirchenrechtliche Abhandlungen, H. 65–68).

4-b) Georg Schreiber, *Untersuchungen zum Sprachgebrauch des mittelalterlichen Oblationswesens.*

4-c) Georg Schreiber, *Ziele der päpstlichen Klosterpolitik im Zeitalter Gratians.* (Antrittsvorlesung, 29. November 1913).

4-d) Rudolf Morsey, *Aus westfälischer Wissenschaft und Politik. Landschaftliches und Universales im Lebenswerk von Georg Schreiber.* In : Westfälische Forschungen. 10 (1957), S. 6–25, hier S. 9.

5）フォルクスクンデ（Volkskunde）をめぐる問題性は古くから議論されており，その主要な論考をまとめたものには次のものがある。cf. *"Volkskunde. Ein Handbuch zur Geschichte ihrer Probleme"*, hrsg. von Gerhard Lutz mit einem Geleitwort von Josef Dünninger. Berlin [Erich Schmidt] 1958.

6）Kai Detlev Sievers, *Fragestellungen der Volkskunde im 19. Jahrhundert. In : Grundriß der Volkskunde. Einführung in die Forschungsfelder der Europäischen Ethnologie,* hrsg. von Rolf W. Brednich. Berlin [Dietrich Reimer] 1988, S. 31–50. bes. 33–36.

7）ヨーハン大公については，レーオポルト・シュミット（河野眞訳）『オーストリア民俗学の歴史』1992（Originalausgabe : Wien 1951）p. 90以下。

8）Adolph Franz, *Die Messe im deutschen Mittelalter.* Freiburg i. Br. [Herder] 1902. Derselbe: *Die kirchlichen Benediktionen im deutschen Mittelalter.* Freiburg i. Br. [Herder] 1909.

9）たとえば次の箇所，Georg Schreiber, Gemeinschaft des Mittelalters. Recht und Verfassung, Kult und Frömmigkeit. Regensburg/Münster 1948 S. XI.

10）Adolph Franz, *Die kirchlichen Benediktionen im deutschen Mittelalter.* Bd. 2. S. 8f.

11）cf. Alois Mitterwieser, *Geschichte der Fronleichnamsprozession in Bayern.* München [Knorr & Hirth] 1930 ; Xaver Haimerl, *Das Prozessionswesen des Bistums Bamberg im Mittelalter.* München [Kosel-Pustet] 1937. (Münchener Studien zur historischen Theologie, H 14)

12）フランツへのシェーンバッハの書評は，In : Zeitschrift des Vereins fürVolkskunde. XII (1902).

13）cf. Anton E. Schönbach, *Über eine Grazer Handschrift lateinisch-deutscher Predigten.* Graz 1890. ; — : *Eine Auslese altdeutscher Segensformeln in Analecta Graecensia.* Graz 1893. ; — : *Zeugnisse Bertholds von*

*Regensburg zur Volkskunde.* Wien 1900.; —: *Über Leben, Bildung und Persönlichkeit von Berthold von Regensburg.* I. u. II. Wien 1906/1907. なおグラーツのシェーンバッハが民俗研究を手がけた背景として，カール・ヴァインホルトが1851年から1861年までグラーツ大学のゲルマニスティクの教授として，大学での民俗研究の最初の人物のひとりとなったことが関係していると思われる。グラーツ大学でヴァインホルトは1852年に「ドイツの神話」(Deutsche Mythologie) の講義をおこなったことが判明しており，そのタイトルからもグリム兄弟の流れを汲むものであったことが知られる。

14) Anton E. Schönbach, *Offener Brief an Eduard Richter über den wissenschaftlichen Betrieb in den Alpen.* In: Zeitschrift des Deutschen und Österreichischen Alpenvereins. Bd. 31.1900. S. 15ff.

15) ファイトの研究は，典礼と民衆の関係を歴史的に追跡していることによって，フランツの延長上にある。特に中世末期の多様な民衆典礼 (Volksliturgie) が，宗教改革を隔てて再び正統な儀礼に編成されてゆく過程を追い，これによって民衆がキリスト教信仰の面で上昇するとともに，教会文化の幅が拡大していったとの見解を示している。cf. Ludwig Andreas Veit: *Kirchliche Reformbestrebungen im ehemaligen Erzstifte Mainz unter Erzbischof Johann Philipp von Schönborn (1647–1673).* (Studien und Darstellungen aus dem Gebiet der Geschichte, VII, H. 3) Freiburg i. Br. 1910.; L. A. Veit: *Kirche und Kirchenreform in der Diözese Mainz im Zeitalter der Glaubensspaltung und der beginnenden tridentinischen Reform 1517 bis 1618* (Erl. u. Erg. z. Janssens Geschichte des deutschen Volkes, Bd. X, H. 3) Freiburg i. Br. 1920. L. A. Veit: *Volksfrommes Brauchtum und Kirche im deutschen Mittelalter.* Freiburg i. Br. [Herder] 1936.; また遺稿をもとにマインツ大学の教会史の教授ルートヴィヒ・レンハルトが完成したものに次がある，L. A. Veit u. Ludwig Lenhart: *Kirche und Volksfrömmigkeit im Zeitalter des Barock.* Freiburg i. Br. [Herder] 1956.

16) バウアライスは第二次世界大戦後はライフワークとして『バイエルン教会史』の執筆に没頭するようになるが，青年期の1930年代には，教会民俗学のなかでもその着想の独創的であることにおいて特異な存在であった。その頃の中心的な成果として次がある。Romuald Bauerreiss: *SEPULCRUM DOMINI. Studien zur Entstehung der christlichen Wallfahrt auf deutschem Boden.* München [Selbstverlag der Bayerischen Benediktinerakademie] 1936.

17) ヒンドリンガーは早い時期に出身地に帰って司祭となり，その郷土の民俗行事である聖ゲオルクの日に教会堂を起点におこなわれる騎馬行列の研究をおこない，それを聖レーオンハルト騎馬巡回などのより広い民間行事にまで展開した。しかしその所論は，ゲルマニスティク系の神話学の思考の枠組を受けいれている点で，ゲオルク・シュライバーを中心とした宗教民俗学の行き方とは差異をみせている。その視点は，その著作のタイトル「聖馬と馬聖」(太陽神の乗り代として本質的に神聖な生き物であった馬が，キリスト教のなかで，儀礼を受けることによってはじめて霊的な保護を得られるものなってしまったという脈絡) に端的にあらわれている。cf. Rudolf Hindringer, *Weiheroß und Roßweihe. Eine religionsgeschichtlich-volkskundliche Darstellung der Umritte, Pferdesegnungen und Leonhardifahrten im germanischen Kulturkreis.* München [Ernst K. Stahl: Lentner] 1932.

18) リヒァルト・アンドレーの著作は，奉納物や献額についての最初のまとまった研究である。cf. Richard Andree, *Votive und Weihegaben des katholischen Volkes in Süddeutschland.* Braunschweig 1904. マリー・アンドレー=アイゼンの研究は，カトリック教会の民俗の他，民家の垣根の形状やその工程などもあつかっている。また特徴ある奉納品など宗教文物について収集を手がけたが，その多くは第二次大戦で失われた。cf. Marie Aandree-Eysen, *Volkskundliches aus dem bayerisch-österreichischen Alpengebiet.* Braunschweig 1910.

19) *"Wallfahrten durchs Deutschland. Eine Pilgerfahrt zu Deutschlands heiligen Stätten."*, hrsg. von Christian Schreiber. Berlin 1928. クリスチアン・シュライバー (Christan Schreiber 1872–1933) は，フルダの神学の教授を経て，1921年にマイセン司教，1930年に初代のベルリン司教となった。

20）*"Lexikon für Theologie und Kirche."* なおこの事典は今日も頻繁に使用され，ペーパーバック版も刊行されているが，改訂の度に民俗学に関係した記述は縮小される傾向にある（現行のものは第3版）。それは 'Frömmigkeit' の扱いに端的に現れている。1957年から刊行されたヨーゼフ・ヘーファーとカール・ラーナーの編集による全面的な改訂版（*"Lexikon für Theologie und Kirche"*, 2. völlig bearbeitete Auflage, hrsg. von Josef Höfer und Karl Rahner）では，この項目はまったく書き変えられ，初版では小見出しとなっていた 'Volksfrömmigkeit' の一節も消滅した。また第2版以降では〈民衆信仰〉（Volksfrömmigkeit）という概念そのものを避けているようである。

21）Michael Buchberger, *Kirche und religiöse Volkskunde.* In *Volk und Volkstum,* hrsg. von. G. Schreiber. Bd. 1. München 1936. S. 32–36. hier S. 33f.

22）Georg Schreiber, *Die Sakrallandschaft des Abendlandes. Mit besonderer Berücksichtigung von Pyrenäen, Rhein und Donau.* Düsseldorf 1937.